

# 真宗概論 (二)

鈴木大拙

## 1

昨日の話の続きですが、大悲と大智というものを *kaya* つまり *body* とする。というても、これは体相用の体とは違った意味の体ですね。相と用に対した体でなくて、いまいう体というのは、大智と大悲というものが有機的に一つになってはたらく。有機的に一つになるというと、また、何か、そういう塊りがあつて、それが動くように考えるけれども、そうではなしに、大悲というものと大智というものが分けられないで、一にして二、二にして一というかたちになって動くようなものが出来ておる——と、そういうことなんですな。

それで、一体、私わたしらは、ものを考えるということになると、——人間は考えなきやならぬが、考えるというときりのないもので、そして、すべての面倒というものは、この考えるということから出てくるんですね。それは、考えないでおるのがいい。考えないでおれるのが一番なんですな。考えないで、所謂無分別の境界なら最もいい。あの、アダムとイヴがエデンの園にいたのは、何も、ものを考えなかった時代ですな。つまり、分別しない。あれとか、これとか、一とか二とか、白いか黒いかというようなことはなしに、白も黒も分別せず、というとな無茶苦茶かというとなうでなしに、蛇は蛇、リンゴはリンゴだと取り扱っている。アダムはアダム、イヴはイヴ、というようになあんなばい

ですな。

ついでに申したいと思うのは、エデンの楽園というのは、アダムとイヴと蛇とリンゴと神様と、それからエンゼル angel が居たように考えるけれども、そうじゃないんです。この世界と同じこと。いろいろのものが——仏教的にいえば、無数の仏も菩薩も声聞も縁覚も、みな居たわけなんです。それを代表的に書いてあるだけで、本当は、今いうようなあんばいなんです。

「それじゃ、お前見て来たか」といわれると「私は見て来た」と、こういうでもいい。「それは嘘だろう」といわれても「嘘ではない」と。それは、分別を離れた世界なんだから、それでいいんだが、けれども、それを「君のいうのも本当かな」などといい出したら、もう分別がついて廻るんだから、面倒になってしょうがない。

どうも人間というものは、考えねばならぬのだし、考えると困るのだし、そこが地獄ですね。善いか悪いか、*“be, or not to be, that is question.”* この question の出るところが地獄なんです。地獄へ行って苦しむんだといつてかかれば何でもないですけどね。苦しむと困るぞ、どんなふうに苦しむのか、などといえは尚更のことだ。極楽へ行っても、その通りですね。極楽へ行って楽しむといつても、ああいう楽しみは、もう地獄の方が、ずーっといいですな。

## 2

そこでですね、人間というものは、考えるのであるが、また考えると困る、と、こういう矛盾が出てくる。いや、矛盾ならいい。矛盾は矛盾として済んだとしても、矛盾だけでなしに困る。苦集滅道というように苦が出てくる。苦集の集は、集めて、そうして出来たというようにいうけれども、集というのは、考えが、そこへ出て来たというようにするのが一番いいだろうと思う。考えが出るといって、苦しみが出て来るんですね。だから、考えが出なかつたら苦しみはない。

例えば、蛇を殺すという場合——、私らの子供の頃に蛇を見ると殺すもののように考えておったが、びちびち跳ねるといふことがある。魚など、毎日食べておるなら尚更だが、跳ねるから苦しいんだらうというが、私らが苦しむように苦しむかどうか、わからんと思います。

神経がどうなっておるか、苦しいということを感じる神経があるから苦しい。神経があるだけじゃない。苦しみの神経が刺激せられるという、苦しいんだと意識する意識があるから苦しい。だから、ただ、びちびち跳ねるだけなら、それが苦しいのかどうかですな。人間でも、例えば、ひどい病気になるという痛い痛いというて苦しむから、注射をするとか、麻酔をかけるとか——、こんなに苦しむなら注射をして殺してしまえ、死んだ方がよからう、と、見ておるものが見ておれずにやる場合がいくらでもあるですね。

それで、神経が無くなつてしまえば、苦しいことがあつても、その苦しみを苦しみと自覚しないから、苦しむじゃないということになる。この自覚するということが、考えるということのもとなんだから、自覚を滅してしまえば苦しみはなくなる。その自覚というのは、考へのも、と、と。その考へがなけりや最もいいことになる。が、それだけなら無分別になつておればいいんだが、人間というものは、自分の苦しみのみでなしに、自分も苦しむから、他人の苦しむのを見て、「気の毒だ、何とか助けてやりたい」ということになるんですね。そうすると、自分が苦しんで七転八倒するだけでなしに、他人のを見て、それを何とか救うてやりたいということになる。これも亦、苦しみのものになる。

自分だけの苦しみを苦しむだけでなくて、他人の苦しみを見て、そうして、その苦しみを自分の苦しみに同様に考えるということになる。彼と私とは違うんだと分別するけれども、その分別を片方におき乍ら、あの苦しみは私の苦しみと同じ様なものだから、私も苦しいということになると、分別がなくなつてしまふ。

分別があるから苦しみが出る。苦しみが出るといふと、自分の苦しみになら、まあ、堪えておく。けれども、他人の

苦しみを見ておるといふと、どうも立っても坐っても居れぬということになるんですね。他人の苦しみだから、いくら心配しても仕方ないんだといふても、自分に親しい者だとか、身内の者だとか、そうでなくても、人間に限らず動物でも、苦しむのを見るときは、何とか世話してやりたいという気持になる。それが亦、悩みのもとになる。そこに限られたものがある。限られたものがあるから、それを超えるようになりたいといふて苦しむようになる。

それで親鸞聖人は、「自分は、この世に於ては、思うように人が救えない」と――。まあ、社会的とか心理的とか色々な条件があるので、それを業というが、その業に限られて他を救うことが出来ぬ。思うように救うことが出来ぬ。全体の人間を救うことが出来ぬ。

これを親鸞聖人は、時間的に、どう考えておられたか。『歎異抄』には書いてないが、若し、その人を救うということを一時にやろうといふのでなしに、今から五十年の計画で、日本人なら日本人、東洋人なら東洋人で、食べられずに困っておる人を貧苦から救うようにしたいもんだと計画的に――五年や十年の計画ではなく、五十年位の計画でもってやっても出来ぬから困るといわれるのか、また五十年や百年でなしに、千年や二千年かかってやっても、それも難かしいといわれるのか。それで、極楽へ行つて、一時に皆を助けてやりたいと考えられたか、どう考えられたかです。

時間を入れるといふと、辛抱が、忍耐が必要になる。そして、これを、無懈怠的な精進忍耐で仕事にかかるといふことになれば、又別ですけれども、それが仲々出来ないで困る。人間というものは、本当に厄介に出来ておるので困る。

### 3

デカルトは「考えるから、自分は存在するんだ」といふようなことをいふが、これは「存在するから考えるんだ」

という具合にいうてもいいですね。考えるから自分があるんだというが、自分があるから考えるんだというてもいい。とにかく自分というものがあって出てくるから困る。そうすれば、その自分というものをどう見るか。

自分というものが無ければ、考えるということも無かろう。考えるということが無けりゃ、苦しみの範囲も、自分の苦しみだけで、他人の苦しみなど考えなくていいという位に最少限度の苦しみを受けて、それでいいということになるかー！と。それでも、どうも気が済まんようになるので困る。それでは、自分というものは何か。考えるから困る。考えるというとは色んなものが出る。出るけれども、考えずにはおれぬ。そうすると、考えずにおれぬという自分なるものは何か。

この自分というものが大変な問題だが、仏教などでも、この自分というものが一番の問題になるですね。生住異滅とか苦集滅道とかいうように、ものが移り変って、変化していくことに重きをおいておるようにみえるけれども、その動き方ですね。動いて止まぬところに動かないものを見る。自分というものが動きつつある間に、動くものを一寸停めて、自分というものは何かと考えるから面倒が出るんだが、動くものは動く儘にしておって、自分を動く儘に見ようとするのが一番理窟に合った行き方——だな。

清沢さん（清沢満之）が自分の信仰とか信条というものを述べたところに、清沢さんは、「自分というものは絶対他力である——」と。『教行信証』の言葉を遣うというと、如来の本願力だな。如来の本願力というものによって動いて因縁の結果で自然に今ここへ出たんだ。それが自分だ、と、こういうことになる。

そういうことになるんだが、自分がそういうものだといっておって、それで自分がわかったかというのと、自分がわからない。自分というものと如来というものと離して、如来を向うにおいて、如来から全てものを受けてくる。その受けるものだという自分は一体何だということになる。それで、これも考えないでおけなくなる。そう考えるというのと、永遠に、何時までも繰返されることになる。

自分はこうだ——と、そういう自分は何だ——と、その何だという自分は何だ——と。こう次々に考えていくという止まりどころがない。永遠に繰返すということになると、また一番始めの元に戻ってくる。始めに、この自分は何だというところに戻ってくるですね。そうすると、次々に考えないで、ここに停っていいということになるですね。昨日、お話したようなあんばいで、十方に満ちている仏様は、今、口の先きにおどっている仏様ということにもなるですね。遠い所へ行かないで、ここへ皆寄せてしまうということになる。

4

キリスト教のバイブルをみると、シナイ山があって、その山の上で、モーゼというのが、稲光の中から現われた神さまから色んな命令を受けて、「お前の民族に、こういうことを伝えよ」と、こういわれた。ところで、モーゼは、「そういわれるあなたは、どなたですか」と——。ただ、ぼんやりと聞いて来たんじゃないかので、何という人からどういうことを聞いたと伝えたいが「あなたは、どういうお方ですか」と、こういうたところが、普通バイブルに書いてある言葉はですね、英語では“*I am that I am.*”となっておる。これは、ユダヤ語では *I am.* というようなことじゃないんだというけれども、バイブルが英語に翻訳せられてから幾百年というものは、そういう具合に伝えられてそうなっているんだから、そうしておいてもよからうと思う。

それから、近頃、日本でも、バイブルをもっと近頃の言葉に訳そうということが行われているが、そのように、近頃の英語に直したバイブル——それは、幾つもあるですね。一つや二つじゃないようだが、その中には、“*I am the God who is.*”となっておる。やっぱり *I am.* の云い方を変えないで、ただ *God* を入れただけになっておる。

それで、「あなたは誰だ」とモーゼに聞かれたら、神は「自分は自分だ」と。ところが、この、自分は自分だとなるといとうと理窟に合わぬ。同じものを持って来て、猫は猫だ、リンゴはリンゴだとなってしまうという、リンゴは

何だ、猫は何だと聞きたがっておるのに、それじゃわからぬ。私らも、そういうことは、しょっちゅういうけれども私は私だでは、どうもわからぬですね。

例えば、私が、初めてアメリカへ行った時に、日本から金をもらったことがある。その時に、銀行だったか、郵便局だったか忘れてしまったが、金を取りに行ったらば、「受取人は鈴木、と書いてあるが、お前は鈴木か」と、こういうわけなんです。 「間違いない、私は鈴木だ」と。私は私だということですね。ところが、銀行は金を払ってくれない。誰かが証明してくれぬといかん——と。つまり、銀行の知った者が出て来て、「これは鈴木だ」といつてくれれば、私は私で通るんだな。ところが、ただ私は私だといつても通らん。そういうことを友人が知っていて、それではまあ金を受取ることができた、ということがあった。

日本でも、あの印というものを、やたらに押すですね。あの印よりも字で書いた方がいいような気もする。昔は、自分で書いたものを花押というておったが、あれがいいようでもあるし、また不便な場合もある。誰か印を持っておれば、自由自在になるから具合がいいということもあるが、この、自分が自分だということほど確かなことはない。ところが、それほど不確かなことは、またないんですね。

あの、何とかいう人は、五十年ですか、三十年ですか、私は無実だ、私は人殺しをしないといい続けてきて、遂に通ったという話ですが、自分を自分だというのに五十年もかからなげや話が済まぬ。自分だけでない、沢山の人や時間と金を費して——。ところが、それも裁判所では、仲々受け容れなかったということだが、ああいうことは宗教世界に於ては考えられないことですね。

宗教世界に於ては、自分は自分である、天上天下唯我独尊というあんばいに、お釈迦様が親の体からとび出した、それほど確かなことはないんだけれども、それをお前がいうても駄目だ——と。やっぱり証人というか、それを証明するようなものが出てこないといかんという。バイブルに書いてあることでも、そういうことがバイブルに書いてあ

るのは、それは本当だ、ということにならぬといかんのですね。

5

バイブルの例を引くと、はじめに闇黒があった。闇黒というか、何とも形のない混沌たるものがあつた。そこで、神様が、「光あれよ」といわれたら光が出て、光が暗さから分れたというように書いてある。その続きが、今いうシナイ山の問答ですね。

シナイ山では、モーゼという人間がおつて、それが何か手帳に書きつけておいたということわかる、とすることにしてもだな、一番始めの創世紀の話を書いてあるところに、「はじめに混沌ありき」。それを誰が見たか——だ。一番始めなら、神様自体も自分ということを知らない時代ですね。神様が「光あれよ」というて、光が暗さから分れた時に、自分が自分になったに相違ない。だから、神様が、まだ混沌の中にいて、光と暗さが分れない時に、神様は自分でも何でもないわけだ。そうするとうと、誰がそれを聞いて来て、誰がそれを見て「はじめに混沌ありき」などということを書いたか——だ。それがはっきりしないとうと、バイブルは嘘から始つていとうてもいいことになる。実際、そういうことをいう人は、幾らでもある。

私は、歴史というもののほど、いい加減なものはないと思うですね。古い文書などを、やたらに集めて来て、そして虫の喰うたものを色々に眼鏡で見るとか、あるいは科学的に紙を検査してみるとかというような、色んなことをやっておる。けど、無くなった紙が、どの位あるかわからんのだからな。無くならないで残つたものは、無くなつたものの幾分の一かわからん。その幾分の一かをとつて、無くなつてしまつたものを何とか片をつけておく、というような話ですね。

私は宮内省に關係した学校におつたことがあるが、皆、大礼服を持たぬとうと儀式には出られないんですね。と



ころが、その大礼服というのは高価なもので、一寸した給料じゃ作れない。それで大抵、大礼服は持たない。そうすると儀式の時どうするかというと、「病気につき出席できません」とか何とか書いたものを提出するんだな。ところが、後に、その届けが残ったとする。例えば、私の届けが残ったとするというと、それで、どう判断するか——だ。

まあ、今のところ、五十年位前のことだから何でもないことだけれども、これを千年も後にもっていくとだに「鈴木書いたものには、こうなっておるから、鈴木はきつと病気だった」と、こういうことになる。そういう習慣になっっておって、貧乏なものは大礼服がないんだということには、又、証拠を出さんならん。が、そういうことを書いたものが残るわけではない。そういうようなことを文章に書くわけではない。

それで、千年とか二千年ということでもなくとも、現在のことも、おかしいことが幾らもある。例えば、喧嘩をしておるとする。喧嘩を見ておっても、先きに手をあげたのは、どっちか——、そういうことの判断を、目撃した人によってみても、一様にいかぬ。その時、写真を撮る人がおって、始めから「今喧嘩するぞ、それ写真撮れ」というわけで、写真を撮って、それも普通に映したんでは駄目だから、スローモーションで映してみると、始めに手をあげたのが段々に手を振りあげておるのがわかる。それで、彼の方が早かったというわけで片がつく。それでも、我々の眼がどうなっておるかということで、同じ写真を見るにしても、早し遅しで困ることもなる。

## 6

それから、近頃死んだフランスの詩人だが、「一番始めにフィクション fiction があった」というんだな。一番始めには事実があったというよりも、フィクション fiction があった。寓話というか、昔話があった。一番始めには昔話があって、それでみんなわかるわけなんだ。その昔話を、みんな、その儘受け容れて、それを本当だとしておる。バイブルに書いてあることは gospel truth で、もう間違いないものとしておる。間違いないということを、バイブル

ルに書いてある言葉で *gospel truth* とうておる。

そういう具合のもので、神が、始めに「光あれよ」といわれた。そうすると、光が暗さから分れてきた——と。この、書いたものが、ユダヤ人の間で、何時頃から出来あがったかわからんが、少くとも四五千年前だろう。もつと前かもわからんが、それから今に到るまで、ずっと信じて来たということがあるとすると、それは単なる昔話ではない。昔話を本当に見るものが、私たちの心に受け取られるだけのものが、何かあったに相違ない、と、こういつてもいい。

そうするというと、フィクション *fiction* というか、そういうものの方が、所謂間違いない事実だというものよりも、もつと真実性を持っておるといえる。そうするというと、客観的に事実だというて、どうのこうのというておるものよりも、その客観に対する主観の方に、その客観の事実を確かだと認めるようなものがなくちゃならん。「うん、そうだ」というて私だけが承知するだけでない。私の他に、皆が承知することができるようなものがなくちゃならん。その「皆が」というのも、私から見ても皆というわけで、だから、人々が独立したものを持っておって、そうして自分に「そうだ」というものを持っていくなくちゃならん。それで、天上天下唯我独尊も、その意味で本気になる。

それで、これは話が別のことになるようだけれども、その客観的ということからみると、自分というものは何もないと、こういうていいですね。例えば、清沢さんのいわれるように、何もかも皆他力だ、と。如来の他力で、私は、もう責任も何もないんだ、みんな他力によるんだ。善いことをしても悪いことをしても、如来様がみんな背負ってくださるから——、それで、さあ悪いことやれ、とはいわんけれども、どちらでもいいということですね。そこに問題がある。どうして清沢さんが、そういわれるようになったか。

私は何も責任がない、みんな阿弥陀様の他力にまかせる。その、まかせるという自分が、やっぱり他力だということになるだろう。ところが、私がということをおわぬというて、どうも他力が出て来ないですね。そういうものにとらうてなったか。例えば、私がここに生まれておる。あなた方でも、ここにおられるというのは、この世に生まれよ

うというて出たわけじゃないから、私に責任はない——と。

私は、親を殺そうと、何を殺そうと、勝手放題だ、親に孝行なんて、そんな馬鹿なことではない。親が勝手に生んだので、私は何も生れようと思うて出て来たんじゃないから、親が私に孝行してくれるのが本当だ——と、こういう具合にも考えられるですね。その親は、また、その親に対して、そういうことをいう。それを段々に追うていくと、神様の方へ責任が行くかも知れない。そうするというと、この世で「私らを、こんな苦しみに関わるのは、神様、あんたが悪いんだぞ」と、こうなる。それで、寄ってたかって神様を殺してしまえとなるが、その殺してしまえも、やっぱり神様がやらせるのだとなると、そうすると結着がどこへどう着くのか、わからなくなるが、それにも拘らず、自分は何も無い、みんな業によって出来ておると、こういう乍ら、そこに自分というものを何か考えるようになっておるですね。

だから、私が、先祖代々、もう百代も二百代も、ずっと遡って行って、そうして今日になって自分というものが少しも出ないようであって、しかも、やっぱり「自分が」ということを考えないではおれないですね。それが、どこから出るか——だ。どう考えても、自分というものが出ようの無いところへ来て、やっぱり自分というものが出て、どうしても、これは親孝行せんならん、友達は仲好くせんならん、世界中が、動物も植物も、みんな仲好くしていかんならん。それは私の責任だ、世界の悪いのは、神様が悪いのじゃない。私が悪いのだ。私一人に、皆それを背負ってしまおう、というようになるんですね。

ところが、そういうことは考えられない、自分は、自分だけ良ければいいんだという人もあるけれども、その自分だけが良ければいいんだという自分というものが、どこから出たか。その自分というものを掘り下げるといって、やっぱり「I am that I am.」になってしまう。

この、自分は自分だということが、どこから出てくるか。自分ということ、自分と他人とに分けないで、自分を

自分だという。その自分は、他から分けた自分ではない。ある意味でいうと、絶対の自分といふものは、絶対の他力というのと同じことですね。即ち、絶対の他力の、他力というものは絶対のもので、それが一番最後のものだというように自分が承知するようにならねばならぬ。それを、他力の阿弥陀様が承知させてくれるんだといえ、そうであるけれども、そこに、自分をそうさせてくれるから、そうするんだ、と、自分がどうしても出てくる。その自分は、他力に対した自分でなしに、他力と一つになった自分だということになる。そうすると、他力と一つになった自分だというと、自が他で、他が自になる。一で二、二で一になる、と、こういうことになる。

そうすると、神が、シナイ山の上で“*I am that I am.*”といったというが、それは、ミステイック mystic な考えになるかも知れぬが、しかし、それは最も歴然として、疑うことのできない最後のところになってくる。その最後のところのものを正覚という。その正覚というものが光だ、と、昨日はいうたが、光というても、これを普通の言葉に直せば、さと、りという。さと、りというてもよし、それから、信というてもよし。

## 7

それから、殊に面白いことは、こういうことは、今のサイコアナリシス psychoanalysis というか、精神病学というか、サイコロジィ psychology というか、何か、そういう方面の研究にも、余程役立つと思うが、柔軟心ということがある。この柔軟心というものは『浄土論』などの中にも出てくるが、この柔軟心を柔軟身というてもいいわけでしょう。どっちでもいえるんだが、それを不二心という。

この柔軟心ということについて『浄土論』では、一法句というてある。略して一法句、それを広げると二十九種の莊嚴功德成就——、それを、ずっと並べて書いてあるが、それを、まとめて一法句。一法句は清浄句、この清浄句が心に受け容れられる時には柔軟心ということになるですね。この柔軟心というところに、面白味というか、甚

だ我々の身に切実な点がある。

これは、道元禪師が、支那で修行をして帰って、「お前は、支那へ行つて何がわかったか」と聞かれたらば、「柔輦心をえた」と。その、道元禪師のいわれた柔輦心ということは、所謂、身心脱落、脱落身心を体験した。その生活そのものを柔輦心というですね。だから、この柔輦心ということは、禪宗の方でもいう。禪宗というところ、何かこわばったような、棒を振り廻すとか、大きな声でも出さぬというところが、どこへ出しても、ころころと行つてしまふ。潰しても、また、ふくれあがるということになると、すこぶる柔輦心の妙味が味われると思うですね。

これは『華嚴經』の入法界品に、善財童子が、弥勒をたずねたとある。それで、これが私の世界だと、弥勒に連れられて行く。そこへ入るといふと、今までの娑婆の有限の世界と遮断せられた違った世界が出てくる。それを、有限の世界から無限の世界へ入ったといふことで、後の戸が、ピシャツと閉つてしまふ——、これは話で、閉めても閉まらぬのだけれども、まあ、閉めたといふことにしておいて、その時に、菩薩は皆、柔輦心をもつておると書いてある。

それから、極楽の描写のところにも、虚無之身、無極之体と書いてあるが、その前の方にも、みんな柔輦心をもつておると書いてある。それで、柔輦心といふことは、我々が極楽に入つてから、極楽的になる一つの条件であると思ひますが、我々は、一寸体が突き当るといふと、「何だ」といふて体を突き返す——といふことですね。

子供の頃には、我がといふものが、よっぽど強いんですかな。あれは明治十年の頃だろう、西南戦争のあつた頃のことですが、私らの国（石川県）の方では、子供は、肩をあげて歩いたものです。どこかの知らぬ奴が来るといふと、肩をぶつつける。そうすると、ぶつつけられた奴は怒る。それから喧嘩をやり出す。その喧嘩は二人だけじゃなしに何町と何町との喧嘩になるですね。そうすると、長い竹を切つて来て——、長いのは六尺か、いや、殆んど一丈もあ

るだろう。その竹で地面を叩いた。向うも叩いてくる。すると少くとも一間以上、一丈位も間隔がある。安全地帯におって、そうして、やっておる。そうすると、時に、きつい奴がおって、両側の竹のとどかぬところを通過して、短い棒をもってやってくる。そういう奴が一人二人出て来たら、もう片方は負けですね。妙なもので、一人でも強い奴が、どこか虚隙をみつけて、そこから切り込むというと、それで負ける。負ける時には、みんな逃げるものだ。もう浮き足立ったら、とめられない。今でいえば、群集心理とはこんなものだと考えたことを、今でも覚えておる。

まあ、そういうように、こわばったものでなしに、皆が柔軟心をもつというと、ふにゃふにゃしたようなもので、とても仕様がないうようなになるかも知れぬけれども、そうではなしに、そこに、ちゃんと I am. というものがある。I am. というものは、<sup>りま</sup>カんでの I am. じゃなしに、ふにゃふにゃになる I am. といっても、ゴム玉なら仕様がないかも知らぬが、そうでなしに I am. というのは、十方世界に瀰漫するところの弾力をもったものであるから、すべてを容れることができる。そういうものが I am.

だから “I am that I am.” にしても “I am the God who is.” にしても、どっちにしても、そこに天上天下唯我独尊というものがある。独尊というものがある。それを名号というですね。

8

唯我独尊が名号、この名号を、浄土教系以外のいい方をすれば、大分長くなるけれども、天上天下唯我独尊で、これが名号ですね。阿弥陀様自身の名号が十方に響かなかったならば、私は正覚を取らぬ。といわれたという。その名号は、阿弥陀如来という名号である。私らの方からいうと、南無をつけた南無阿弥陀如来。

で、この、名ということだが、名がないということは、そのものが無いと同じことなんです。此れに名をつける

というと、此れと彼とは違ふというあんばいで、此れがはっきりと浮いて出てくる。名が無いというと、此れと彼と区別が出来なくなる。

これは、大分前に読んだ話ですが、ヘレン・ケラーという、あの、眼が見えず、耳が聞えず、口がきけず——。その人に教えた先生は、よほど偉い先生ですね。その人が、ヘレン・ケラーに、ものの名を教えたけれども、わからぬのですね。ところが、ある時、ポンプの水を揚げた。そうして、水が、どつと出たら、水が冷たくて手をひっこめた。その時に、「これが水だ」と、教えた。が、どうして教えたのですかな。耳は聞えず、眼は目えずなんだから——しかし、どうかして教えた。すると、「ああ、これが水か」とわかった。それから、すべてのものに名があるということがわかった。名があるということがわかったら、世界が、はっきり眼に映った——といっても、眼が見えぬのだから仕様がなすが、とにかく見えたんだな。それから、この世界が意味をもってくるようになった。今までは、盲目の世界だった。もののない世界だった。

動物の世界、例えば、うじ虫のようなものには、触覚はあるんだが五管はない。そうするというと、どうなるんですかな。暗闇の世界というか、そこには、名は勿論無いんだから、そこで、ざとりを聞くということは出来ぬだろう。ところが、そこに名号というものが出来た。名号というものが出来たら、それが明るみになって、ものがわかってくるということになる。それで、阿弥陀の名号というものが、十方世界に響いて、全ての仏や菩薩に咨嗟せられなかつたら正覚を取らぬという意味は、ただ名が世界中に響いたというような、そういう意味の名じゃない。名号というものは、単なる名声が天下に響くというような名じゃない。そういう名じゃない。名号というものは、ヘレン・ケラーが、水に触れて水の実体をにぎったと同じ名号ですね。その名号というものがわからにゃならん。

まあ、今日は、くたびれたので、これで休みます。明日の話は、また、ほかのことになるかも知れぬが、今日は、これで失礼いたします。

(本稿は、さる昭和三十八年六月十日より大谷大学において開講された特別公開講座の、第二日目の講話の筆録である。文責 伊東慧明)